

---

あとがき  
Postscript

河野貴美子  
KAWANO, Kimiko

総合人間学会発行のオンラインジャーナル『総合人間学研究』第15号をここにやっとお届けでき、編集委員一同、ほっとしているところである。

今さらいうまでもなく、2019年暮れに中国武漢に端を発したCOVID-19禍は学会活動にも大きな影響を及ぼし、2020年6月に予定されていた年次大会は中止せざるを得なくなった。毎年、大会における一般発表演題や若手シンポジウム演題を中心にこのオンラインジャーナルは編纂されていたことから、発刊に際しての原稿募集など、どうするか議論されたが、通常通り会員に原稿を募り、発行に向けてスタートした。その結果、今号の掲載論文は、エントリーがあった投稿論文のうち査読などを経た「一般投稿論文」3本、「海外投稿論文」1本（原文はドイツ語、日本語訳のみ掲載）、「研究ノート」2本、「エッセイ」2本、「各種委員会からの報告」4本、「特別報告」1本の充実したジャーナルとすることができた。

そのような中、しかしながら、編集委員会としては委員の交代、役割の見直しなどで、それぞれがまだまだ編集業務に精通しているとは言えず、さらに投稿規定の見直し、役員体制の充実など多くの課題を今後に残したままである。編集にも手間取り、ご投稿いただいた方々にご迷惑をおかけしたことをまずお詫びしたいが、同時に常に会員の皆様に支えられていることに感謝している次第である。

さて、今号の巻頭には、「総合人間学会設立の背景と発展」として総合人間学会会長の尾関周二氏に学会設立に至る経緯とその後を詳しく語っていただいた。設立当初の小原秀雄氏や小林直樹氏の熱い思いを共有しながら、学会の今後を会員全員で考える契機としたい内容である。

続く投稿論文3点は、それぞれの視点からの興味深い論考となった。佐藤氏の「新しい物質主義の展開と可能性」は、近年の新しい実在論のうち、日本でまだまだ取り上げられていないという「新しい物質主義」について詳しく展開し、様々な分野への影響にも言及している。次の野口論文「日本における予防接種施策の歴史の変遷について－2009年以降の予防接種施策転換の国内外要因の分析を中心として－」は日本におけるワクチン施策の歴史的な変遷である。日本においては副反応などによるマイナス面が大きく報じられることが多く、常に接種率の低さが問題であったが、今回のコロナ禍で大いに関心を集めることになっている話題であろう。楊氏の論文は「配分依存：全人的発達を抑制する生成メカニズム」と、タイトルは難しいが、自身や友人らが経験した進学、受験競争などから台湾における学歴社会、そのシステムや問題点を、時に日本とも比較しながら取り上げ、人間発達の面から掘り下げている。

次のロルフ・パール氏はドイツからの投稿で原文はドイツ語であるが、ここには猪刈由紀氏による翻訳文のみ掲載した。日本語タイトルは、「集合的シンボルによる政治的介入、理論的出発点、方法論のプロセスと分析例」で、私たちにとって、文化的な面でもお互いの理解においても言語の重要性は言うまでもなく、そのディスクール分析は大変難しいテーマであるが、地球温暖化の責任を訴えたグレタ・トゥンベリが用いた集合的シンボルを例にあげることでわかりやすく説明されている。

昨年から新たに設けられたジャンル、研究ノートには三浦氏の「人間の宗教性に関する若干の考察」および小倉氏の「精密科学と厳密科学の区別－ひとりではできない総合について－」を掲載した。三浦氏は「若干」と言いつつかなり壮大な、全宗教を網羅しながら人間の過去から現代に至る営みの中で精神性を論じており、小倉氏は本学会における大テーマ「総合」を本学会のこれまでの議論にも言及しながら、三つの視点から検討したもので、両研究ノートとも本学会ならではの論考である。

---

エッセイとしては2点寄せられた。入江氏の「生物の主体性について－今西進化論を考える－」は、環境にうまく適合した種が生き残ってきたとするダーウィンの進化論に対し、生物は外界の環境に対して受け身ではなく主体的に存在するとする今西進化論を見つめ直し、生物の主体性をダーウィニズムの検討も含めて改めて論じた。また、清氏の「高橋和巳論へ至る私の道」ではご自身が昨年出版された『高橋和巳論——宗教と文学の格闘的契り』をまとめられた経緯などが詳しく述べられた。

次に各委員会からの報告としては、まず研究談話委員会から、2020年9月に行われた《コロナ禍と総合人間学》における2演題で、まず宗川氏の「コロナパンデミックで見てきたこと－これからの社会を考える－」、および清氏の「怨恨的復讐心か、共苦か？－コロナ禍が浮かび上がらせている問題系を問い直す－」を寄せていただいた。ウイルスそのものの話から社会的問題まで、興味深い論点が展開されているが、この《コロナ禍と総合人間学》は談話会テーマとしてまだ続かざるを得ない状況であろう。そして、11月に行われた《学術会議問題と学会声明から、学会と学問のあり方を考える》では、柳沢氏から「日本学術会議問題への一視点」のタイトルで、学会としての問題意識を共有すべく掲載した。こちらもいまだに決着には至りそうもない問題である。

また、キーワード（KW）集発刊委員会はその報告集を委員会として別途、オンラインにあげることであるが、ここには「キーワード（KW）集発刊委員会2020年度報告－「総合人間学 KW集記述モデル」に関して－」として、ごく概略的な内容紹介をしてもらった。

その他、会員の書籍紹介が5点、これらを参考にご興味をもたれた書籍を手にとっていただければ幸いである。

最後に、相変わらず慣れない作業で戸惑いながらでしたが、編集委員諸氏に助けられ、さらに本学会編集担当幹事の鈴木朋子会員にはいつもながら多くのご助力をいただきました。また、タイトルの英語表記に関しては、津田塾大学 Chris Burgess 氏に大変お世話になりました。ここにみなさまに心から感謝の意を表します。

[かわの きみこ／副編集委員長／脳科学]